

reProducer Audio Epic 5

取材協力: 有限会社エニシング・ゴーズ、株式会社フックアップ

今春、日本に上陸した「reProducer Audio」は、知る人ぞ知る「United Minorities」のCEO、アティラ・サージェック (Attila Czirjak) 氏によって2015年に設立された新興のスピーカー・メーカーだ。ドイツ南西部のブライザハに拠点を置く「United Minorities」は、20年以上にわたってドイツやスイスのコンサート・ホールサウンド・システム構築/音響デザインを手がけてきた会社で、著名なプロデューサーやサウンド・エンジニアたちにスピーカーやアンプ、マイクロフォンなどをカスタムメイドで製作してきた実績を持つ。そんな「United Minorities」のアティラ・サージェック氏が満を持して立ち上げたメーカーが「reProducer Audio」であり、いま欧米のスタジオ関係者間で、大きな注目を集めている新ブランドなのだ。

「reProducer Audio」の第一弾製品となるのが「Epic 5」とネーミングされたパワード・モニターで、ユニークな形状の筐体にオリジナルの1インチ径ツイーターと、5.25インチ径のウーファーを搭載。加えて底面には6.25インチ径のパッシブ・ラジエーターを搭載し、そのコンパクトなサイズからは想像ができないパワフルな低域と広大なダイナミック・レンジを確保している。使用されているオリジナル・ドライバーはすべてアルミニウム製で、非常に速いトランジェント・レスポンスを実現しているのも大きな特徴だ。そこで本誌では、自身のスタジオに「Epic 5」をいち早く導入した音楽プロデューサーの浅田祐介氏に、その実力を伺ってみることにした。

海外の作家とのコラボで スーパー・ローの重要性を 再認識した

PS このスタジオではこれまで、メイン・スピーカーは何を使用されていたのですか？

浅田 「Dynaudio Acoustics BM6」を、かれこれ10年くらい使いました。「Eclipse TD-M1」もありますが、これ

は導入してまだ半年くらいですね。

「BM6」が気に入っていたのは、歌を録るのがラクだったんです。中域の密度が高く、情報量が多いので、歌の具合がよく分かる。例えば、歌を4本くらい重ねたときのピッチのズレ、広がり感は、中域の情報量が多くないと分からないんです。「ヤマハ NS-10M」も同じようなスピーカーだと思いますが、あれは中域の密度が高いと言うよ

りも、意図的にクセを付けて見えやすくしているところがあって。EQでピークを付けているような、1~2kHz近辺がポコッと出ているのが分かる。なのであのスピーカーでずっと作業していると耳が疲れてしまうんですね。「BM6」はそんなクセは無く、情報量が多くとても満足していたんです。

PS それが今回、「BM6」を入れ替えられたのはなぜですか？

浅田 「BM6」には満足していたんですが、海外の作家さんとコラボするようになり、スーパー・ローの重要性を改めて意識したんです。よく、この仕事を始めてかれこれ30年くらいになるんですが、日本人の中では太い音を出すプロデューサーだと思っていたんですよ。人からもよく洋楽志向と言われますしね。でも少し前にコラボした海外の作家さんから、「音が細いよ」と言われてしまって(笑)。「お前がバラで送ってくれたトラック、キックにローが全然入ってないんだけど」とか言われて、「え、オレの音って細くてローが無いの？」って凄く焦ったんですよ。でも冷静になって、自分の環境では太いと感じる音が、海外の連中の環境では太く聴こえないということ



ドイツ「reProducer Audio」の初の製品となる「Epic 5」。20年以上にわたり、ドイツやスイスでシステム設計や音響デザインを手がけてきたアティラ・サージェック氏が満を持して完成させたスタジオ・モニターだ



音楽プロデューサー、浅田祐介氏のプライベート・スタジオ。「Epic 5」は、「Output」のデスク「Platform」にセッティングしてある

は、自分の環境に何か問題があるのではないかと。それでいろいろ考えた結果、スーパー・ローの有無が音の太さに影響しているんじゃないかという結論に行き着いたんです。それが新しいスピーカーを探し始めたきっかけですね。

PS スーパー・ローが必要と言うのは、ダンス系の音楽に限った話ではなく？

浅田 関係無いですね。だってビリー・アイリッシュだって、ザ・チェインスモーカーズだって、ダンス・ミュージックではないですけど、凄くローが入っているじゃないですか。向こうの音楽ってカントリーでもしっかりローが入ってますからね。それは Spotify とかで洋楽と日本の音楽を並べて聴くとよく分かりますよ。日本の音楽だけ極端にスッカスカな音がしますから。もちろん、そういうチャキチャキした音が J-POP の特徴だということも理解しています。海外でも、日本の音楽のチャキチャキした音が好きな人はいますし、それで J-POP のブランディングができていくことは分かる。おそらく音圧を稼ぎたいからローをカットしたいんでしょうけどね。でもプレイリストで洋楽と邦楽を横一列で再生すると、そのショボさが際立ってしまう。ぼくの周りの若いクリエイターたちはその

ことに気付き始めていて、皆んな「やっぱりローを出さないとヤバイよね」となってますよ。なぜスーパー・ローの重要性に気付き始めたかという、若い世代はイヤフォンで音楽を聴くからなんです。ぼくらの世代は未だに最後はラジカセでミックス・チェックしますけど、いまだラジカセで音楽を聴く若い子なんていない。皆んなイヤフォンで、スーパー・ローが出る環境で音楽を聴いているんです。イヤフォンで洋楽と J-POP を並べて聴くと、日

本の音楽のローの無さ、ショボさに本当に驚きますよ。

PS 海外の作家さんとコラボを始めて、そのことを改めて認識したと。

浅田 低域に関しては、2年くらい前からいろいろ考え始めていたんです。ローがしっかり見えている状態で音圧を稼げるようにならないとダメだなと。ローが見えていないのにマスターにリミッターをインサートして、低域に歪みが生じてしまったら最悪ですから。イージーに「iZotope Ozone」とかをインサートすると、低域が歪んでしまっていることに気付かないんですよ。タイトなスーパー・ローなんだけれども、マスターでしっかり音圧が入っているのが理想だなと、このところずっと思っていたんです。

Epic 5 は スーパー・ローがしっかり見えて 歌録りに重要な 中域の解像度も十分

PS 新しいメイン・スピーカーとして、「reProducer Audio」の「Epic 5」を導入されたきっかけをおしえてください。

浅田 「reProducer Audio」のことはまったく知らなかったんですが、代理店の方から「試聴しに来ませんか？」と



音楽プロデューサー、浅田祐介氏。1968年東京生まれ。1995年にフォーライフからアーティスト・デビューし、4枚のアルバムをリリース。その後は音楽プロデューサーとして Chara、Crystal Kay、CHEMISTRY、織田裕二、キマグレンなど、多くのアーティストを手がける。近年はミュージシャンズ×ハッカソンやエンターテック系イベントの企画運営も行い、デザイナー YUMA KOSHINO と音楽レーベル「Blind Spot」を立ち上げるなど、活動の幅を広げている。一般社団法人 JSPA 理事。



「Epic 5」の背面。入力はバランスのXLR端子とアンバランスのRCAピンの両方を装備。スタンバイ・スイッチやHF-TRIM / LF-TRIMなども備える



底面に6.25インチのパスシブ・ラジエーターを搭載しているのは「Epic 5」の大きな特徴。パスシブ・ラジエーターを含むすべてのドライバーは、自社開発のアルミニウム製



専用ケースが付属するのもポイント。いろいろな現場に持ち運んで作業する人は重宝するだろう

お誘いいただいたのがきっかけです。それで興味があったので、ウチの作家を何人か連れて代理店のデモ・ルームに試聴しに行ったんですよ。

それで聴かせてもらったのですが、コンパクトなのにローが凄く出ることに驚きました。これはラージの音がするスピーカーだなど。キックとベースの関係性がよく分かって、懸念だったスーパー・ローもしっかり確認できる。こういう音って、「Barefoot Sound」や「Musikelectronic Geithain」といったメーカーの大きなスピーカーを大音量で鳴らさないと出ないと思っていたので、これは凄いなと思いましたね。音

量をそれほど出さなくても、ローがしっかり見えるんです。

ローが出るスピーカーって、逆に高域が気になるというか、バランスが悪く感じるものもあつたりするんですけど、「Epic 5」は上もかなり伸びている。歌録りで重要な中域の分解能も十分に、全体にリアルに鳴っているということが実感できたので、試聴しに行ったその場で導入を決めてしまいました。とにかくこのサイズで、ローをリアルなことに聴けるというのは画期的なことだと思います。

PS セッティングはどのようになっていますか？

浅田 「RME Fireface UFX」から直接繋ぎ、「Output」の「Platoform」に載せて使っています。ボリュームは2〜3時くらいで、背面のEQは高域/低域ともにフラットですね。スウィート・スポットはそれほど広いスピーカーではないので、設置位置や角度などは慎重にセッティングした方がいいと思います。

PS 数ヶ月メイン・スピーカーとして使用されて、率直な感想はいかがですか？

浅田 本当にローがよく見えるので、凄いスピーカーだなと思います。底面にアルミニウム製のパスシブ・ラジエーターが備わっているんですが、ぼくはパスシブ・ラジエーターってあまり好きではなかったんですよ。ローが少し遅れて聴こえてしまうのが気になって、例えば同じタイミングで4つ打ちのキックとベースを鳴らしたときに、キックのアタックが目立って聴こえてしまうので……。しかしこの「Epic 5」は、そういう遅れはまったく感じない。おそらくはこの変わった形状で、低域と中高域の耳への到達時間を揃えているんでしょうね。低域が遅れて聴こえるというパスシブ・ラジエーターへの先入観が吹っ飛びましたよ。

PS 中高域の解像度はどうですか？

浅田 かなり情報量のあるスピーカー



Apple iMacを挟む形で「Output Platform」にセッティングされた「Epic 5」

です。プラグインのパラメーターを髪の毛1本分変えたのが凄くよく分かる。そういったほんのちょっとの差異が分からないスピーカーって多いじゃないですか。でも「Epic 5」は、コンプのかけ方で音の面積が変わったり、音が奥まったり、前に出たりとかがしっかり分かる。髪の毛1本分のツツミの変化が、しっかり聴き取れるんです。これだけローが出るスピーカーなのに、音の解像度も高いというのは、やっぱりドイツ人が作ったスピーカーだなという感じがしますね。「Epic 5」を使い始めてから、かなりアナログ機材を使うようになりましたよ。今まであまり好きではなかった「Neve」のクローンとかも使うようになりましたし。シンセも壁にずっと立てかけてあった「Prophet-5」を徐々にセッティングしたりして。ローやミッド・ローの音作りは、アナログ機材の方がやっぱりや

りやすいんだということを改めて認識しました。

PS これまでいろいろなスピーカーを使ってこられたと思いますが、「あのスピーカーっばい」というのはあったりしますか？

浅田 うーん、なんだろう……。ローの感じや解像度は違いますが、イメージ的に一番近いのは「KRK」ですかね。「KRK」の音って曲を書くときにヤル気にさせてくれるじゃないですか。音が良くも盛り上がらないスピーカーって多いと思うんですけど、「Epic 5」は曲を書くときにヤル気にさせてくれるサウンドなんです。作業していて盛り上がるサウンドというか。

PS 長時間作業したときの使用感はいかがですか？

浅田 大きな音量で長時間聴いていると、どんなスピーカーでも疲れてしまうと思うんですけど、この「Epic 5」は

大音量ですつと作業していても全然疲れないですね。

PS 一番気に入っているのは、やはり低域の出方ですか？

浅田 そうですね。単にスーパー・ローが出るだけでなく、低域の位相もしっかり分かるんです。例えばこの曲(ビリー・アイリッシュの『bury a friend』をかける)、低域が左右に広がっているんですが、キックはモノで、左右に広がっているのはベースなんだということが分かる。これが分からないとヤバいんですが、現実には分からないスピーカーの方が多いと思いますよ。今や40Hzや60Hzで何が起きているかがしっかり見えるスピーカーでないと本当にダメだと思います。

PS 浅田さん周辺では、「Epic 5」の評判はいかがですか？

浅田 まだ知らない、聴いたことがないという人が多いと思うんですが、既にこのスタジオに3人くらい聴きにきましたよ。その中の1人はすぐに注文してしまいましたね。本当にこのスピーカーは、即買いするだけの魅力がある。だってペアで15万円ですよ。実際に音を聴いたら、皆んなその場で注文してしまうのではないかと思います。

PS 本日はお忙しい中、ありがとうございました。

reProducer Audio Epic 5
市場実勢価格:150,000円(ペア/税別)
問い合わせ:フックアップ
Tel:03-6240-1213
http://www.hookup.co.jp/



浅田氏のプライベート・スタジオにセッティングされた「Epic 5」



「Epic 5」を導入してからは、アナログ機材の出番が増えたと語る浅田氏。「Epic 5」を使い始めて、ローやミッド・ローの音作りは、アナログ機材の方がやっぱりやりやすいんだということを改めて認識した(浅田氏・談)